

# 世代を超えて音楽でつながる絆 無限の可能性秘める音楽の力

町内唯一の吹奏楽グループ「ジョイサウンズ」  
今だからこそ求められる「世代を超えた交流」の先に見えたもの。

13年前に結成した吹奏楽グループ「ジョイサウンズ」が、昨年12月に初めて自分たちで企画・運営して開催した、コロナに負けるな公演。新型コロナウイルスの影響で、すべてのステージが中止に追い込まれたことがきっかけでした。世界中が、先の見えない不安に包まれている今こそ、「音楽の力」で希望を見出したいと踏み出しました。

## 慣例を見直し意義を問う機会に

新型コロナウイルスの感染者が国内で初めて確認されてから1年が経ちました。「新しい生活様式」「3密回避」「ソーシャルディスタンス」など聞きなれなかった言葉も、今は当たり前のように使われるほど私たちの生活は大きく変化し、社会や個人の価値観も急激に変わりつつあります。この未曾有の事態の前に変化を求められ、必要性やあり方そのもので問われているのが、祭りや伝統行事、スポーツ大会や公演、さらに学校行事といった、多くの人が集まるイベントや催しの開催です。錦江町内でも花瀬公園まつりやレゲエまつり、文化祭や各地域の夏祭りといった毎年開催されていた催しの数々も、相次いで中止に追い込まれました。さらに、9月から実行委員会組織を立ち上げ、8人の若者

たちが本番に向けて準備を進めてきた成人式も、全国的な感染の広がりを受け、開催日未定の延期という苦渋の決断を迫られました。毎年3月に行われている花瀬駅伝大会も、昨年につき2度目の中止が決定。感染予防を最優先に考える主催者としては、やむを得ない判断を迫られ、その決断を求められています。

一方で、慣例を見直すきっかけや転換点にもなった新型コロナ。これまで当たり前だったことが出来ない現実の前に、本当に必要なものはないか、なぜ開催するべきかを問い続けることで、目的や意義、本質が見え始めてきたのかもしれない。空気のように身近な存在ほど、その大切さには気付きにくいもの。毎年行われていた地域の祭りや年中行事もそのひとつで、なくなつて初めて開催できることへの感謝や、喜びを実感するのではないのでしょうか。

## コロナ禍でのイベントを模索 逆境だからこそその挑戦が始まる

昨年12月、コロナ禍での新たなイベントを模索した錦江町青年団が行ったライブインシアター。飲食販売も事前予約で対応するなど、人と人との接触を極力避け、車内から映画を観る新しいスタイルは、これからのウィズコロナ時代で「当たり前」になるのかもしれませんが。

また、町内唯一の吹奏楽グループ「ジョイサウンズ」は、徹底した感染予防対策を行ったうえで、結成後初となる自主公演を昨年末に開催。「先の見えない不安を抱き、すべての日常が一変した今こそ、これまで以上に人と人とのつながり、地域の支えや交流が求められている。今こそ一歩前に踏み出す転換期に来ているのでは」と、代表を務める君付忠和さんは話します。逆境に立たされたからこそ始まった新たな挑戦。

「正解はどこにもない。しかし、できない理由よりできる方法を考えたい」と強く前を向いた君付さんが描く、世代を超えた交流と絆、音楽が秘めた力、その限らない可能性にスポットを当ててお伝えします。



写真は令和元年11月に開催された錦江町文化祭で演奏を披露するジョイサウンズ。令和2年度は町文化祭を始め10公演以上が中止に追い込まれた。